

『愛をなぞるマリアーージュ』

著：柘平ハルモ

ill：六芦かえで

「起きているか」

声をかけられたのは、小半時ほど経ったあとのことだ。

扉をノックされ、千郷は体を起こした。

聞こえてきた声は、誠志郎のものだった。

「起きています」

そう応えて、彼を迎え入れるためにベッドから下りる。

いったい、こんな時間になんの用だろう？

疑問には思ったけれども、「彼と親しくなって、好きになってもらうこと」が今の千郷の目標なのだから、誠志郎のほうから部屋を訪ねてくれたのなら、拒む理由はなかった。

「どうかしましたか、せ……叔父さん？」

語尾が上がり調子になったのは、彼をどう呼べばいいのか、いまだ迷っているからだった。

たぶん、その千郷の気持ちは誠志郎にも伝わっているのだろう。彼はかすかに、右頬を歪めた。

「誠志郎でいい。入るぞ」

そう言うと、彼は千郷を押しつけるように部屋の中に入ってきた。

誠志郎の体の後ろで、かちゃりと音がした。

千郷は小さく首を傾げる。

今のは、いったいなんだろう？

鍵の音……——と気づくより先に、誠志郎は動いていた。彼は慣れた手つきで、千郷のガウンの前をはだけさせていたのだ。

「な……っ！」

千郷は、思わず絶句する。

下着もなにもつけずに、裸の上にガウンを一枚まとっているだけだ。当然、肌を隠すこともできず、露わになってしまう。

「な、なにを……っ」

はだけたガウンの前を慌てて合わせようとする右手を、誠志郎は掴んだ。

「裸か、ちょうどいいじゃないか。隠すことはない」

「え……」

「おまえは、俺の妻だ。……そう、言っただろう？」

思わせぶりに笑った誠志郎は、強引に千郷の顎を掴んだ。

——嘘……っ！

千郷は、大きく目を見開く。

たしかに、『妻』なんて言っていた。でも、あれは質の悪い冗談だと思っていた。

でも、ここまでされたら、実際に触れられてしまったら、冗談の範囲から逸(いつ)脱(だつ)する。

「なあ、奥さん？」

からかうように千郷へと呼びかけながら、誠志郎はくちびるを近づけてきた。

吐息が、千郷のくちびるにかかる。

——キスされる？

千郷は、大きく目を見開いた。

誠志郎の瞳は冴え冴えとしていたが、その底には千郷に対する強烈な負の感情が澱(よど)んでいた。

そんな目で見える相手を、たとえ冗談だろうがなんだろうが、『奥さん』と呼ぶなんて信じられない。

千郷はまだ社会に出ていない学生の身だ。でも、まるっきり子どもというわけではなかった。なにか、誠志郎という人が抱えている歪みのようなものを、感じずにはいられなかった。

どうして、彼はこんなことをするのだろう。

——させては、いけない。

ふいに、そんな想いが胸を衝く。

誠志郎を止めなくてはいけない。自分のためにも、彼のためにも。そんなことを、理屈ではなく感じた。

「……や、め……っ」

千郷はもがいて、なんとか彼のくちびるから逃れようとする。

「なぜ？」

「……っ」

耳元で、誠志郎が囁(ささや)く。

この上もなく、冷たい声で。

「金のために、俺の家族に……——夫婦になることを、承諾したんだろう？」

「それ、は……」

金のため、と言われると、心臓がきゅっと掴まれたような心地になる。

叔母への援助を望むのは、つまりお金が欲しいということ。それは否定できない。だから、千郷の中にもどこか、後ろめたさが消えないままなのだ。

誠志郎は、悪意に満ちた表情で笑う。

「それならば、妻の務めは果たしてもらおうか。初夜のベッドから逃げ出す妻が、いったいどこにいる？」

「あ……っ」

耳元に、くちびるを押しつけられる。きつく吸われる。そのとたん、ざっと全身に熱が広がっていくようで、思わず千郷は身を竦めてしまった。

——信じられない。

千郷は自分自身を守るように、体を小さくする。

誠志郎は、千郷にセックスの相手をさせようとしていた。千郷はそちらの方面には疎いが、さすがにこんなふうに触れられたら、何をされるかわからないはずがない。

「……でも、こんな……っ」

千郷は、小さく首を横に振った。

「俺、そういうつもりじゃなくて」

いまさら、誠志郎にとっては言いわけにしか聞こえないかもしれない。けれども、そ

れは千郷の嘘いつわらざる気持ちだ。

「じゃあ、どういつもりだ？ 賭はやめるか」

「や、やめません！」

千郷は、大きく首を横に振る。

自分の双肩に、叔母夫婦の命脈がかかっている。ここで逃げ出すわけにはいかないのだ。

「それならば、おまえの選ぶ道はひとつだ。観念してベッドに横たわって、さっさと足を開け。一ヶ月、家族ごっこにつきあってやるんだから、俺にも役得のひとつくらい寄越せよ」

千郷は、血の気が引くのを感じた。

「本気、ですか……？」

「……どうして人が、わざわざ兄弟でも親子でもなく、夫婦だと言い出したのかわからないのか？」

誠志郎は、千郷の双(そう)眸(ぼう)を覗きこんできた。

「少しは楽しませろよ」

敵意に満ちたその眼差しは、千郷の表情の変化をかけらも見逃したりはしない、とでも言わんばかり。

千郷を見つめているというよりも、視線で嬲っているという表現のほうが、より正しいのかもしれない。

千郷は、小さく息を呑む。

どうしても、ここまで彼に敵意を向けられる理由が理解できなかった。

本文 p54～60 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>